

総論 天草諸島の歴史と現在

——周縁プロジェクト「天草フィールドワーク」を終えて——

荒武賢一郎

はじめに

関西大学文化交渉学教育研究拠点（ICIS）の「周縁プロジェクト」は、2010年度に引き続いて2011年7月25日から8月1日の日程で、熊本県天草諸島の総合調査（天草フィールドワーク2011）を実施した。前年度は、諸島の中央部でしかも限定的な範囲だったが、今回は、いくつかの重点調査地を設定しながら、周辺地域を含めて全体的な把握に努めた。

一 天草フィールドワーク2011の成果

1. 調査の概要

周縁プロジェクトでは、教員・研究員・大学院生の共同作業として2年間に及ぶ天草諸島の総合調査を計画した。具体的な準備を始めたのは2010年2月からであり、最初の全体調査まで半年間の余裕をもって臨んだが、終わってみればもう少し事前になすべきことがあったように感じる。ただし、筆者も含めたほとんど全員が初めて天草に足を踏み入れたわけで、参加者それぞれにとっての収穫があったこと



写真1 天草市崎津地区の風景

を考えれば申し分ない結果であろう。初年度の研究成果としては『周縁の文化交渉学シリーズ2 天草諸島の文化交渉学研究』（2011年3月刊）で、調査メンバーが手がけた論考を発表している。

今年度は、教員・研究員5名、大学院生13名の総勢18名でフィールドワークに臨んだ。昨年同様、調査班を5つ（地理・文学・集落・交流・生活の各グループ）に分けて、機動性を持った活動ができるよう行動計画を立てた。また、班長（教員・研究員）をのぞく大学院生は、多様な研究方法を習得するために調査期間中に複数のグループに所属する形態を採った。昼間は、グループに分かれて行動をするが、たとえば3班が合同でフィールドワークを行うことや、夕食後のデータ整理作業に続き、全体ミーティングを実施し、各班の成果を共有しながら全体の意思疎通をはかる努力をしたのも重要だった。

2. 調査地域の特質

天草諸島は、いわゆる「平成の大合併」で行政自治体が2市1町（天草市・上天草市・苓北町）に集約された。当地を訪れた誰しもの感じるのだが、天草は思ったより広い。天草市内で移動をするにも、市役所の所在する本渡から南部の中心地牛深へは自動車でも1時間はかかる。

地元の人々にインタビューをすると、隣の地域とは言葉のイントネーションが違う、お祭りが違う、食べる料理が違う、といったように当たり前のことだが、一口に天草と称しても、そのなかにある地域、集落で独自の姿がみえてきた。その点は、今年の調査で得た成果であり、今年は地域にこだわって、しかもひとつだけではなく、できるだけ多くの町をみていくことにした。

① 牛深調査

今回、もっとも時間を多く費やし、調査人数をかけたのが、天草市牛深町である。牛深は古くから港町として繁栄し、天草の経済的拠点だった。天草で漁業といえば牛深、といわれるように水産業で隆盛を極めている。ICISの取り組んでいる文化交渉学の研究にとって、打って付けのフィールドだ。ここで



写真2 牛深八幡宮

は、吉川茂文氏（牛深観光ボランティアガイド）をはじめとする地元の皆さんの助力を得て調査を実施した。特筆すべきは真浦・加世浦地区（漁業集落）のフィールド調査、そして牛深八幡宮の古文書調査であろう。真浦・加世浦の空間的特徴は「せどわ」である。道幅1メートルにも満たない細い小道が集落全体に通る。外部の人間が入ると、途中で方向がわからなくなるほど、民家がひしめきあっている。

牛深八幡宮では、貴重な古文書を実見することができた。神社や寺院の古文書は、宗教的価値もさることながら、地域の成立を読み解くヒントを与えてくれる。牛深の歴史・文化にも詳しい田代壽興宮司の丁寧な解説とともに、神社や牛深の由緒について多くの知見を得た。

しかしながら、不漁に伴う漁業および地域経済の低調、そして過疎化が牛深の抱える深刻な課題となりつつある。これは牛深に限らず、天草全体、さらには日本全国の農山漁村が直面する問題だ。吉川氏の「みんなが調査に来てくれて町が明るくなったように思う」との言葉が印象的である。

② 伝承されていく地域文化

文学班が着手したのは、「郷土史」「地域新聞」の調査であった。濱名志松五足の靴文学資料館（天草市大江）は、天草で研究を続けて『九州キリシタン新風土記』など多くの著作を発表した濱名志松氏の記念館である。今回は、父の資料を大切に守る濱名正光館長に協力を得て、未整理の文書類を中心に調査を進めた。天草には公立の博物館・資料館がたくさんあるが、その一方でこのように私立で運営される施設の存在も大きい。

昨年からの継続として、天草市立天草アーカイブズが所蔵する『みくに』や『天草毎日新聞』など、天草で発行されていたいわゆる「地域新聞」の写真撮影やマイクロフィルムによる閲覧を行った。昭和戦前期から戦後期にかけて、地域新聞は当地の情報・文化の拡充に大きな意味を持っており、その内容を分析することが今後の地域史研究にも役立つであろう。

③ 資料をつなぐ

交流班では、こちらも昨年に引き続き、天草市立本渡歴史民俗資料館所蔵の石本家資料に含まれる美術品調査を実施した。石本家は江戸時代後期に天草有数の豪商として知られ、長崎や大坂などとの交易により巨万の富を得た。現在、石本家文書の大部分は九州大学に寄贈されて文献史学からの研究が進められており、次いで今回の調査で手がけた美術品の分析が期待されているところである。古文書と美術品の研究成果を融合することで、新しい事実が明らかになるだろう。

3. 西海地域の魅力

天草五橋で九州の宇土半島とつながる大矢野島や天草上島および八代海（不知火海）に面した地域は、歴史的変遷からも熊本側の影響を受けている。昨年のフィールドワークで本拠地とした苓北町は地理的環境から長崎との関係が深いし、南東部では鹿児島島との緊密な接点も見出される。ほかにも、天草島原一揆のあと、無人になったところに、現在の佐賀県や鹿児島県から集団で移住をしたという由緒を持つ地域もある。

牛深、御所浦島、棚底、御領、湯島を重点調査地に設定したことで、そのような独自の特徴を有する



写真3 天草市棚底地区の風景

各地の姿をしっかりと見ることができた。本論ではないが、天草における食事はもちろん魚料理が中心であるものの、各地に移動するなかで我々が口にする魚の種類はバラエティに富んでいる。これも独自文化を醸成するひとつの要素なのだろう。

天草を網羅的に調査したわけではないが、重点調査によって詳細な「地域の顔」を知ることができた。その一方で、天草諸島とつながる近接地域を含めた分析視角も必要になってくる。これも限られた時間ではあったが、鹿児島県出水郡長島町、熊本県宇城市を全体調査として訪問した。

長島は牛深からフェリーで30分の距離で結ばれる。現在は阿久根市との間に黒之瀬戸大橋が架けられて、九州とは陸続きになっている。この島は地理的には天草諸島に所属するが、戦国時代に薩摩の島津氏が領有したことから、以降は薩摩国、そして鹿児島県となったところだ。当地の資料閲覧やフィールドワークによって、天草との共通点、そして相違点も窺えた。

宇城市では、こちらも天草と目と鼻の先にある三角地区、そしてかつての商業港の松合地区を見学した。近代におけるターミナルであった三角西港は、地元の人々によって世界遺産登録に向けた推進運動が展開されている。たしかに明治期の町並みを彷彿とさせる建物の数々は当地の文化の象徴ともいえる。

二 長い歴史を有する天草の地域研究

フィールドワークでの調査をもとに、研究成果を向上させていく。これが、我々メンバーに課せられた宿題だ。天草で調査をしていると、今まで知ることのなかった非常に興味深い事実に出会うことしばしばである。それをもとに研究を進めてみようと思うが、先行研究を紐解いてみると、だいたいの概要は先学の研究者が明らかにしてくれていた。とりわけ天草の郷土史・地域研究には分厚い歴史が存在する。

天草の地域研究者の系譜については、2010年の天草地域交流講演会において鶴田文史氏より紹介があ

った。2年間の天草研究プロジェクトにおいて関西大学の調査メンバーで共有した文献データベース（前著『天草諸島の文化交渉学研究』巻末で紹介）には、550点もの研究書・論文・史料集などを収録した。我々が手にすることのできなかった、あるいは専門分野が少し異なっていた、などという書籍を含めれば、その数は数倍に膨れあがるだろう。

昨年調査から、史料所蔵者や協力者の皆さんとお話するときに出てくる天草の研究者の芳名は、だいたい北野典夫、鶴田倉造、鶴田文史、濱名志松、平田正範といった人々である。どなたも天草で住み暮らし、天草を愛する地元の研究者たちである。もちろんその他の人々を含めて、天草の「先生」たちは皆さん史料に実直に向き合い、そしてさまざまな角度から議論を展開されている。鶴田文史氏には、2年間続けて講演会の講師を務めていただき、濱名志松五足の靴文学資料館では、濱名氏が生前懸命に取り組まれた研究の足跡を確認すべく原稿類や書簡類の整理を行った。牛深調査のときには、図書館の資料室で数え切れないほどの平田正範氏自筆による翻刻原稿を発見したこともある。いずれも先達が培われた成果を継承しながら、我々なりの新しい視点を鍛えてきた結果が本書の論考である。

三 近世天草は貧しかったのか？

——郷土史・文献史学の足跡と現代社会への問いかけ——

天草の歴史研究の成果についてもう少し具体的な提言を行いたい。ここでは、史料が豊富に残る江戸時代の天草研究に関して考えてみたい。

先述のように、天草には秀逸な研究者たちが在住し、郷土史研究が戦前から盛んに実践されていた。郷土史および文学などを含めた「郷土文化」研究は天草の歴史を包括的にとらえ、現代に生きる我々へのメッセージとして「近世天草像」を伝えている。そして、これも戦前から現代に至るまで活動を続ける九州大学九州文化史研究所（現・九州大学附属図書館附設記録資料館九州文化史資料部門）のメンバーによる成果は、同大所蔵の石本家文書にかかる分析を中心として、江戸時代天草の経済・経営、行政・自治、社会的諸関係などについて多くの成果を提供している。そして、地域を固定化することなく、西海地域全体をとらえながら行われているキリシタン研究は、宗教的および民衆的視座からの歴史解明が繰り返し展開され、多方面へと影響を与える分野として注目を集めている。

1. 研究史から得られる「近世天草の特徴」

近世天草の特徴とは何か。先行研究が積み重ねてきた成果を鑑みたとき、キーワードとして挙げられるのは、「天草五人衆以後の政治」、「天草島原の乱」、「鈴木代官」、「土地希少と過剰人口」であろう。天草五人衆以後の政治とは、戦国時代から江戸時代に入っていく過程、そして1637年（寛永14）の天草島原の乱、それ以降の復興を進めた鈴木重成といった流れで理解されよう。また、経済史や地域社会史の議論からは、「天草は人口増加に比して田畑が少ない」という結論も導き出されている。

高等学校までの日本史の授業で、「天草島原の乱（島原の乱・島原天草一揆などと表記）」は必ず登場する大きな事件である。手元にある石井進ほか著『改訂版詳説日本史B』（山川出版社、2008年刊）では、次のように説明がなされていた。

1637（寛永14）年に島原の乱がおこった。この乱は、飢饉のなかで島原城主松倉氏と天草領主寺沢氏が領民に苛酷な年貢を課し、キリスト教徒を弾圧したことに抵抗した土豪や百姓の一揆である。島原半島と天草島は、かつてキリシタン大名の有馬晴信と小西行長の領地で、一揆勢のなかには有馬・小西氏の牢人やキリスト教徒が多かった。益田（天草四郎）時貞を首領にして原城跡に立てこもった3万余りの一揆勢に対して、幕府は九州の諸大名ら約12万人の兵力を動員し、翌1638（寛永15）年、ようやくこの一揆を鎮圧した。（173～174ページ引用）

これは歴史を愛好する方、天草をよく知っている方の誰もが熟知する「乱」の概要である。現在もこのような認識でいたい語られているだろう。この乱の研究はさまざまな研究者によって詳しい分析が施されているから、専門書の内容になればもっと緻密な実証がなされている。上記のような短文で説明できるのは、それだけ多くの研究蓄積があることを裏付けているのだ。

2. 古文書は本音を語っているか——史料批判の必要性——

話題を近世天草の特徴に戻したい。政治・行政組織などの変遷をひとまず除いて考えると、先行研究が教えてくれるのは「江戸時代の天草（＝庶民）は貧しかった」という結論に至る。果たして本当にそうなのだろうか。

研究史の流れを考えてみると、戦後の歴史学は当初「民衆運動」や「農民闘争」および「農民＝困窮」史観を具体的に作り上げていった。そのような雰囲気における考察では、事実をしっかりと論証しているものもあれば、理論ありきで実態と乖離した分析結果も多数みられる。それはともかく、天草の郷土史研究にもこの戦後歴史学の分析視角は大いに受け入れられ、かなりの影響を与えたといまになっては思われる。

たとえば、天草の田畑を中心とする土地所有や売買に関しては、次のような評価が認められよう。

- A) 土地が狭い、土地の売買が頻繁に起こる、狭い耕地に比して人口が多い＝困窮
- B) 耕地が狭いうえに強固な支配・搾取される農民たち＝民衆の反発

非常に単純化した特質であるので、極端な表現になっているようにも思うが、概ねこのような天草の理解は、戦後の歴史学および郷土史において形成されてきた。近年、本戸組大庄屋木山家文書を中心として近世天草の状況を考察された共同研究、渡辺尚志編『近世地域社会論』（岩田書院、1999年）も基本的にはこの流れを継承する。

天草の人々は絶え間なく困窮の域を脱せず、領主への反発の機会をひたすら願っていたのだろうか。歴史学者網野善彦氏は、日本史における農業中心史観に異論を唱え、「農民＝百姓」ではなく、百姓とは商工業者を含む多様な生業従事者だと提起した。この「非農業」への注目は、農民に対する「海民」あるいは「海村」の研究へと展開するのである（網野善彦『日本社会の歴史』上・中・下、岩波新書、1997年。同『日本の歴史00 「日本」とは何か』講談社、2000年など）。これらに関する議論は賛否両論があり、いまだ詳しい結論が出ていないわけではない。しかし、少なくとも「土地ありきで社会や経済を考え

る」という偏った姿勢で地域を語ってはならない。それを網野氏は教えてくれた。天草の歴史的考察を深めるなかで、なぜ「農村中心史観」で当地を分析しなければならないのか。また、それに関わると何を根拠に「困窮史観」が声高に主張されるのか。これらは、すぐに解決するわけではないが、史料を丹念に分析することで結果は出てくるように思う。

今回のフィールドワークで調査の機会を得た、上天草市の吉田家文書にあった史料を紹介したい。以下の文書については、本書所収の荒武賢一郎「史料紹介 上天草市吉田家文書」に全文翻刻を掲載しているので、合わせて参照されたい。

明治維新直前の慶応3年（1867）正月に、天草郡の大庄屋・庄屋たちは代官所に対して歎願を行っている。当時、天草郡は幕府領で日田郡代の支配下にあったが、近隣の大名（島原藩）の預所支配（幕府領ながら大名へ支配を委託される）に切り替えられるのではないかと噂が流れ、大庄屋などの地域有力者たちはその回避（幕府領支配のままでありたい）を願った。当時、大矢野組大庄屋であった吉田家には、この歎願に関わる文書が5点残っている。それを筆者の考察によって作成順に並べると、①吉田家文書44「乍恐御歎願奉申上候書付」（卯<慶応3年>正月 作成者未詳）、②吉田家文書61-1「乍恐御歎願奉申上候書付」（慶応3年正月 作成者未詳）、③吉田家文書61-4「乍恐御歎願奉申上候書付」（75もほぼ同文、卯<慶応3年> 天草郡大庄屋・庄屋→）、④吉田家文書18「乍恐御歎願奉申上候書付」（慶応3年正月 天草郡大庄屋・庄屋連名→富岡御役所）となる。

①～④はどのような形で作成されていたのか。歎願の主旨は、「天草郡を幕領のままにしてほしい」ことにあるが、どれも同じ内容ではない。さまざまな修飾・推敲が行われていることが原文を読めば理解できる。つまり、願いを聞き入れてもらうための「手段」が講じられているわけであろう。筆者が閲覧したことのある石本家文書など、他の天草関係史料でも、たびたび同じような「困窮」が歎願書で述べられる。彼らの文書作成の目的は、「いかにして目的を達成するか」ということにあり、天草の現状を極めてリアルに語るものではない。この結論として願書の史料解釈によって、もし近世天草の特質が形作られてきたならば、再考の余地が多分にあるだろう。耕地の狭小、それに比する人口増加も含めて、これらの理由は「天草の困窮」を実証していることにはならないからである。

筆者がいろいろな文献を見ていくと、近世天草の「困窮」史観は歴史研究者によって編み出されたものではないのか。そのような疑問を抱くようになってきた。決して研究者が嘘をつくために論著を書いているのではない。ここには、史料の分析視角や我々の生きる現代社会との関係が複雑に絡んでいる。郷土史家と島外の歴史研究者が連携を強化することは重要な意義を持つが、事実と反する歴史理解を提示して、誤解が住民に根付いてしまう危険性を自戒の念を込めて意識していきたい。

四 地域と大学の連携

昨年来、我々のフィールドワークを支えてきたのは、地元の人々である。教育委員会を筆頭に自治体の皆さん、そして故郷を愛する有志である。これも当地に限ることではないが、歴史・文化の調査は必要だと誰もが思っている一方で、なかなか着手ができない現状がある。かたや、ICISではこのような実地調査の経験から大学院生を育成し、将来の研究向上に結びつけようとしている。この両者の出会いは、



写真4 天草地域交流講演会

非常に有意義なもので、全国的にも調査のモデルケースとなるであろう。

天草と関西大学の連携は、成果の共有というところでも深まりつつある。たとえば「関西大学地域交流講演会」と題して、調査期間中に地元住民との交流の機会を設けた。昨年は天草地域研究の鶴田文史氏に講師を引き受けていただいた。そして、今年は鶴田氏に加え、平田豊弘氏（天草市教育委員会）のお二人に地元代表として演壇に立ってもらい、ICISからは藪田貫教授、大学院生の王海氏が天草フィールドワークの成果発表を行った。一般の方々も多く50名近い参加者を得た。

また関西大学の他の研究者も天草に関心を持ち、我々と連携する形で現地調査を実施された。天草フィールドワークの3週間後、伝統文化論・文化遺産学をご専門とされる関西大学文学部の森隆男教授と大学院生・学生5名が現地調査を行われた。その成果も本書で発表していただいている。これも地域と大学の連携を拡充させる良い機会であった。

筆者の私見となるが、2年間に及ぶ天草調査で得たものは、多分野に関わる研究者が集う総合調査の重要性、そして新しい研究手法の模索、創造であった。これが文化交渉学の未来へつながる貴重な財産になったことは言うまでもない。

五 天草研究の歴史と現在——展望と期待——

本書のタイトルを『天草諸島の歴史と現在』としたのには意味がある。今回のフィールドワークで天草の皆さんが我々に語ってくれた「地域の誇り」、かたや「これからの不安」を凝縮した表現として「歴史と現在」を主題にした。それは歴史世界と現代社会が通じているものだというメッセージでもある。

日本の各地では大学や研究機関が地域のなかに入って調査を進めている。その調査とは、自己の研究テーマに基づく専門的な活動になるが、その多くは学会発表や本書のような調査報告書・論文集で公表されていく。ただし、これが必ず調査先の人々の目に触れるとは限らない。関心の有無もあるから、当

然といえばそうなのだが、協力した人たちからすれば、調査の結果はどうだったのかという答えがないままになってしまうこともある。我々は2年間の調査を通じて得た成果や情報は、できるだけ地域に還元し、関心のある人々とともに新しい研究スタイルを作っていこうと意識したつもりである。

成果や情報の共有といっても簡単にはいかないことも多い。しかし、少なくとも本書のような調査報告書で論文・記録を残し、仮に我々が生きていないだろう100年後にも何らかのメッセージを残したいと思っている。さらに、調査済み史料の目録化も促進させて、所蔵者や研究者への情報提供も行ってきた。これもいったん作成しておけば、消えるものではないので、成果としては重要な位置づけがなされている（もちろん作っただけでなく更新も重要である）。

次いで必要なのは発信である。今回の場合、天草の皆さんに理解を深めてもらう、そして我々も天草研究の知識を獲得する、という両者の関係が最初に来る。しかし、ここで終わってしまえば、大きな広がりがない。それには我々なりの発信が求められる。やるべきことは、学問の世界への紹介と学説の提起である。2年間という短い時間ではなかなか難しい気もするが、今後への展開を含めて天草を研究する意義をどんどん主張したい。

地域の皆さんが胸を張って「我が家（我が村）の誇り」を主張してほしいと思っている。私が言わなくても天草の人たちは、しっかりと誇りを堅持されている。ただ、その一方で不安も多いのではないだろうか。2年間、天草では数百人に及ぶ人々と交流する機会を得たが、課題として挙げるならば以下のようなことが言えるかもしれない。

- ① 古文書を読める人（教えてくれる人）がいない
- ② 自分の家、地域の歴史が知りたい
- ③ 天草への誇り・愛着と過疎化

この3つの要請や課題は、私自身が看取したものであり、地域社会の総意ではない。しかし、これらは天草に限らず、日本の多くの地域社会が抱える難問や要求でもある。我々の調査がこの問題点をすべて解決できるわけではないが、何かしらのきっかけや接点を持ちながら地域への貢献をしたつもりである。その意味では、本書をはじめとする天草フィールドワークの調査が天草に何らかの良い影響を与えることを期待したい。

